

『紅樓夢』の續書『後紅樓夢』の出現について

藤 田 尚 代

はじめに

『紅樓夢』は、その續書^①の多いことでは、中國文學史上で空前ということが出来るが、『後紅樓夢』は、これら續書の中で最初に出現した小説である。

この小説冒頭に附された逍遙子なる人物の手による序によれば、近ごろ、白雲外史・散花居士が、曹雪芹の手になる『後紅樓夢』三十卷の遺稿を発見し、これを入手し刊行したのが、この書だと書いている。この白雲外史と散花居士が同一人物なのか、あるいは二人なのか不明だが、恐らく實際この書の作者は、曹雪芹でもなければこの白雲外史・散花居士でもなく、正にこの序を書いた逍遙子その人であつたと思われるが、この人物については今のところ一切わからない。

次にこの書の成立年代については、嘉慶三年（一七九八）に出た、仲振奎による「紅樓夢傳奇」跋文によれば、

壬子（乾隆五十七年、一七九二）秋末、臥疾都門、得『紅樓夢』於枕上讀之、哀寶玉癡心、傷黛玉・晴雯之薄命、惡寶釵・襲人之陰險、而喜其書之纏綿悱惻、有手揮目送之妙也。同社劉君請爲歌辭、乃成葬花一折、遂有任城之行、厥後碌碌、不遑搦管。丙辰（嘉慶元年、一七九六）客揚州司馬李春舟先生幕中、更得『後紅樓夢』而讀之、大可爲黛玉・晴雯吐氣、因有合兩書度曲之意、亦未暇爲也。

と見え、この『後紅樓夢』は、遅くとも嘉慶元年（一七九六）までには成立していたことがわかる。

本小考では、『紅樓夢』續書の研究の手始めとして、この『後紅樓夢』が執筆された意圖につい

て、考えてみたいと思う。

(一) 『後紅樓夢』出現までの経過

『紅樓夢』は作者曹雪芹が死んだために八十回までの未完のまま世間に傳わった小説である。その後、百二十回の『紅樓夢』が出版されるが『後紅樓夢』は、この『紅樓夢』百二十回の後に續けられた作品である。それでは、まずいかなる流れで『紅樓夢』百二十回ができ、また『後紅樓夢』へとつながるのかを概略説明しておきたい。

曹雪芹は心血をそそいで書いた『金陵十二釵』と題する小説が完結を見ることなく亡くなったのであるが、それは乾隆二十七年の除夜、一説には翌年乾隆二十八年の除夜のことであった。曹雪芹の没後、生前曹雪芹の身邊にいて、彼の書いた原稿を抄寫し、かつ批評を加えていた脂硯齋なる人物が『脂硯齋重評石頭記』（以下これを「脂本」と稱する）と題する「定本」を作成しようとする。今も何種類かの「脂本」が現存するが、これも完成することなく原稿は脂硯齋の手から離れ、この未完のままの殘抄本が巷間にしばらく流布したものである。

乾隆五十六年（一七九一）に萃文書屋から、最初の本版本が出版された。『新鐫全部繡像紅樓夢』（以下これを「程甲本」と稱する）と題するこのテキストは百二十回からなっており、はじめに程偉元と高鶚二人の手になる序がついていた。さてこの書は、伊藤漱平氏の言を借りるならば、「その前八十回の本文は脂本の系統に屬し、續く四十回、すなわち脂本にあったの未完の部分は、高鶚によって補われた、少なくとも彼の手で纂修されたと考えられる。」⁽²⁾ものであった。つまり、この「程甲本」のうちの「後四十回」は、曹雪芹によって書かれた部分ではなく、後人高鶚の作だということからすれば、この「後四十回」も續書的一种とも言えるものである。ただ今日では、この高鶚の書いた「後四十回」の内容は『紅樓夢』第五回の「金陵十二釵正冊」や「紅樓夢」曲、さらには脂硯齋評から豫想される後段の顛末に沿った、つまり故曹雪芹の意向に可成忠實に沿ったものと考えられている。

この「程甲本」は、大分よく讀まれたようで、『後紅樓夢』につけられた逍遙子の序にも「自鐵嶺高君^③梓成、一時風行、幾於家置一集。」と書かれている。この「程甲本」を受けて、しかもこの「程甲本」が出版されていくばくもなく書かれたのが『後紅樓夢』である。では、逍遙子はなぜ人氣のあつた「程甲本」を向こうにまわして、更に屋上屋を重ねるかのようにして筆を執つて『後紅樓夢』を書いたのであろうか。

(二) なにゆえ『後紅樓夢』を書いたか

「程甲本」が出版されたことによつて、それまで一部の讀書人たちの間だけで讀まれていた『紅樓夢』が一氣に世間に廣まり、子女の間にも愛讀されることとなつた。

樂鈞の「耳食錄」二編に次のような文章がある。

近時聞一癡女子以讀『紅樓夢』而死。初、女子從其兄案頭搜得『紅樓夢』、廢寢食讀之。讀至佳處、往往輟卷冥想、繼之以淚。復自前讀之、反覆數十百遍、卒未嘗終卷、乃病矣。父母覺之、急取書付火。女子乃呼曰「奈何焚寶玉・黛玉？」自是笑啼失常、言語無倫次、夢寐之間未嘗不呼寶玉也。延巫醫雜治、百弗效。一夕瞪視牀頭燈、連語曰「寶玉寶玉在此耶！」遂飲泣而瞑。

ここには、『紅樓夢』に夢中になりすぎ狂い死にした若い女性のいたことが書かれている。ここに言う「讀至佳處、往往輟卷冥想、繼之以淚。」とは恐らく高鶚による後四十回續作のうちの一つのクライマックス、つまり賈寶玉がだまされて薛寶釵と結婚し、林黛玉は失意のまま病死する九十七、九十八回の悲劇の部分であつたと思われる。

このように「程甲本」が出版されると、その悲劇的結末に悲しむ讀者のことを伝える記事はこの他にも多々見られる。

そもそも中國の庶民レベルでは、いつまでもこのような悲劇的結末に満足しておれなかつたものと想像される。^④

凡讀『紅樓夢』者、莫不爲寶・黛二人咨嗟、甚而至於飲泣、蓋憐黛玉割情而死、寶玉報情而遁也。

とは、『紅樓幻夢』（道光二十三年刊）巻首につけられた花月癡人による序の一部だが恐らく「程甲本」に接した大半がこのような想いを抱いたに相違あるまい。

なによりも『後紅樓夢』を筆頭としてそのあと續々と飽くことなく作られた『紅樓夢』の續作のすべてが大團圓で終わるようになっていていることが、雄弁に當時の一般讀者の切なる願いを物語っている。

では『後紅樓夢』は、なにゆえ書かれたのであろうか。この點について作者自身は、第一回書き出しの部分で次のように述べている。

至全書以寶玉・黛玉爲主、轉將兩人折開、令人怨恨萬端。正如地缺天傾、女媧難補。正是寶玉主意、央及曹雪芹編此奇文、壓倒古來情史、順便回護了自己逃走一節、不得已將兩箇拐騙的僧・道也說做仙佛一流。豈知他兩箇作成成雙、夫榮妻貴、寶釵反居其次。直到了曹雪芹全書脫稿、寶釵評論起來說、「你兩人享盡榮華、反使千秋萬古之人爲你兩人傷心墮淚、於心何安？」於是寶玉再請雪芹另編出後紅樓夢、將死生離合一段真情、一字字直敘。雪芹亦義不容辭、此後紅樓夢之所爲續編也。

これを見てもわかるように、この『後紅樓夢』が書かれるに至る経過をわざと大變もつてまわつたものになっている。まず、「程甲本」を見た薛寶釵が事實と異なりこれでは讀者に誤解を與えるからよくないと寶玉に注進する。寶玉も、もつともだと思ひ事情を説明して曹雪芹に再び筆を執つて書き直してもらつた。その書き直したものが、この『後紅樓夢』なのだといふ。つまり、『紅樓夢』に登場する寶玉や薛寶釵らを曹雪芹と同列の實在の人物であつたかのように作中登場させ、しかもこの『後紅樓夢』の作者も曹雪芹だとしているのである。しかしこれは後述するとおり、この續作品を權威付けせんが爲の一つのしかけであり、この作品が初めから終わりまですべて素性不明の逍遙子なる人物の手になることは、冒頭で觸れたとおりである。

さて、一回のこの一節で逍遙子自身、何故この小説を作ったのかについて、端的に述べている。つまり『紅樓夢』は賈寶玉と林黛玉の二人が主人公となつてゐる作品であるのに、「程甲本」ではこの二人を仲違いさせているばかりか、二人をして結婚させないことにすらなつてゐた。この點に讀者は皆等しく切齒扼腕した。そして、賈寶玉が相愛の林黛玉と死別し、薛寶釵と結婚するという「程甲本」の悲劇的結末にどうしても納得がいかず、なんとしても最終的に寶玉と黛玉とが結ばれるという大團圓にもつていきたい。だからこの『後紅樓夢』が書かれたのだと、ここでは述べているのである。

更に逍遙子自身もつと端的にこの『後紅樓夢』を作つた動機を書いた一文がある。それは、この小説の冒頭につけられた「後紅樓夢摘絃前紅樓夢簡明事畧」なる一文である。これは「前紅樓夢卷帙浩繁、或有未購前書及已購而未便攜者、爲敘事畧、以便參考」とあることからわかるように、逍遙子が『紅樓夢』のあらすじを簡單に説明しようとしたものであるが、隨所に逍遙子の主觀が入り、また『紅樓夢』百二十回が悲劇で終わつた後に『後紅樓夢』を續けやすいように書きかえてゐる。例えば次のような文章がある。

一、黛玉機警而辨、熙鳳竊畏之矣、使偶寶玉必反家政也。適王夫人之姊薛姨攜其女寶釵來、有麗色又柔訥而下人。熙鳳心竊喜、以爲王夫人之姊女也、是可惑寶玉而逐黛玉。

二、黛玉痛念無家、又熙鳳等擠排不已、求速死、而病益深。

三、於是襲人於王夫人前譖晴雯及似晴雯之五兒、並及黛玉。

四、寶玉本富貴子弟不習苦、又悟僧・道之蠱也。適遇賈政於毘陵驛乃自歸、政驚喜攜歸。適遇黛玉・晴雯之反生、而盡悟熙鳳之詐、乃援賈母之治命爲作合焉。

一、二、三の文章は、金陵十二釵の一人でもある王熙鳳を黛玉に害をなした惡者として紹介し、『後紅樓夢』の中では遂に生き返ることもなく惡者のまま葬り去つてゐる。また、襲人も熙鳳同様に黛玉に害をなした惡者として描かれてゐる。逍遙子は、『紅樓夢』を読み、『後紅樓夢』を書くにあたって、自分が黛玉を生き返らせる時に邪魔な存在をまるで『紅樓夢』においてもそうであつ

たかのように紹介しているのである。四の文章では、『後紅樓夢』に續けやすいように付け足した部分で「程甲本」にはない筋立てである。そして、最も逍遙子の意向を窺い知ることができる一文がその最初にある。それは、次のとおりである。

紅樓夢何以作？爲賈寶玉・林黛玉夫婦作也。

逍遙子が、『後紅樓夢』を書いた理由はいろいろあるだろうが、一番の思ひはこれであつたと考える。つまり「程甲本」で賈寶玉と林黛玉とが夫婦として結ばれなかつたことを一番の不満として、この點を改めるために逍遙子は『後紅樓夢』を書いたと考えられるのである。

(三) 『後紅樓夢』という書名について

逍遙子はなぜこの書を『後紅樓夢』と名付けたのであろうか。逍遙子が『後紅樓夢』と名付けたのは單なる偶然だつたと考えてよいのであろうか。私は、逍遙子が意圖的にこの書名にし、しかも絶対に『後紅樓夢』でなければならぬ理由があつたのだと考える。作品を讀んでいくと『紅樓夢』百二十回のことを「前書」、「前紅樓夢」と述べており、また『後紅樓夢』とあわせて「前後兩部書」、「這兩部書」と述べている。

それでは具體的に例を擧げてみることにする。

一、後紅樓夢簡文溫理、信可歸結前書。(原序)

二、一是書序後有賈氏世系表・世表、並前書簡明節略、悉照原本刻入。(原序凡例)

三、一是書原稿、同前書原稿合裝一部。原本序・題・評・跋甚多、今前書已盛行各省、不必再刻、故刻後書但刻原序一首、餘題詞評跋亦未刻入。(同右)

四、因想起前紅樓夢一書、只因順了寶玉的意、多有失支脫節、粉飾挪移之處。(第一回)

五、原來黛玉・寶釵平日很敬重曹雪芹、一則是賈政・寶玉的至交、二則是前後紅樓夢兩書總爲他夫婦三人寫照、心裏十分感激。(第三十回)

以上のように數點を例に擧げたが、「前書」、「前紅樓夢」が『紅樓夢』百二十回を指している

ことは明らかである。逍遙子は、『紅樓夢』百二十回に續く書として『後紅樓夢』を書きたかったのではなく、『紅樓夢』百二十回は完全ではなくあくまで前半部分の未完のままであり、『後紅樓夢』と合わせて初めて完璧な『紅樓夢』であるとしたかっただけではないだろうか。逍遙子の述べた『紅樓夢』とは、『紅樓夢』百二十回と自分の書いた『後紅樓夢』であり、そうするために『紅樓夢』百二十回を「前書」、「前紅樓夢」と述べていると考えられる。特に「前紅樓夢」と述べることは續作者にとって、大變重要なことであつたと考えられる。『紅樓夢』百二十回を「前紅樓夢」と讀者に印象付けることによつて、『後紅樓夢』と對をなしているかのように錯覺させ、より『後紅樓夢』を『紅樓夢』という作品において重要視させることが可能だからである。

これは、『紅樓夢』百二十回との關連性を強調し、また『後紅樓夢』を權威付けしようとしていることの現れであると考ええる。また逍遙子は、自分の作品を權威づけるために、作中に頻繁に曹雪芹を登場させ、この作品も曹雪芹の作であるとしている。

實は、前書たる『紅樓夢』百二十回においても、作中、曹雪芹が登場していた。しかしそれは次に擧げるように、第一回と第百二十回の僅か二ヶ所に登場するにすぎない。

一、後因曹雪芹於悼紅軒中披閱十載、增刪五次、纂成目錄、分出章回、則題曰『金陵十二釵』。(第一回)

二、那人道、「你須待某年某月某日某時、到一個悼紅軒中、有個曹雪芹先生、只說賈雨村言托他如此如此。」說畢、仍舊睡下了。那空空道人牢牢記着此言、又不知過了幾世幾劫、果然有個悼紅軒、見那曹雪芹先生正在那裏翻閱歷來的古史、空空道人便將賈雨村言了、方把這石頭記示看。那雪芹先生笑道、「果然是賈雨村言了。」空空道人只便問、「先生何以認得此人、便肯替他傳述。」雪芹先生笑道、「說你空空、原來你肚裏果然空空……。」

(第百二十回)

以上からもわかるように、いずれも曹雪芹は『紅樓夢』の編纂者としてわづかに顔をのぞかせているにすぎない。ところが『後紅樓夢』では、曹雪芹は賈政・賈寶玉親子の親友として作中頻繁に

登場している。今、いくつか重要と思われる箇所を挙げると、

三、曹雪芹紅樓夢一書、久已膾炙人口、每購抄本一部、須數十金。(序)

四、是書係曹雪芹原稿。每卷有雪芹手定及瀟湘館圖章。全書並殘缺、故以重價得之、照本付梓、間有須修飾處、亦未增減一字、欲全廬山真面也。(凡例)

五、原來黛玉・寶釵平日很敬重曹雪芹、一則是賈政・寶玉的至交、二則是前後紅樓夢兩書總爲他夫婦三人寫照、心裏十分感激。(三十回)

六、這位雪芹先生又是一箇光明磊落之人、不肯低首下心、再去求這五斗米的。這黛玉有的是銀子、什麼事情辦不出來？便悄悄的打發蔡良・單陞往曹雪芹家鄉置了三千金一所住宅、也有榮哇・花園・竹園・藕池。(第三十回)

このように『後紅樓夢』の作中、曹雪芹がなぜ頻繁に登場することになっているのか、逍遙子の眞の意圖を推し量ることは難しい。ただこの作品もやはり曹雪芹の作品だとしているのは、『後紅樓夢』を『紅樓夢』との関連性を強調し、しいてはこの作品を權威づけしようとした爲かと考えられる。

ところで、この逍遙子という人物については、今のところその素性は皆目わからないが、今挙げた六の文章より、林黛玉が曹雪芹の窮狀を知って、雪芹の故郷にやり手の下男、蔡良と單陞の二人を派遣して財政的援助をするというくだりがあることからして、もしかすると逍遙子自身、晩年の曹雪芹を知っていた人物ではなからうかとも考えられる。

おわりに

以上のように『後紅樓夢』は、『紅樓夢』百二十回が悲劇に終わったことへの不満から出現した小説であつた。『後紅樓夢』の出現は、『紅樓夢』が悲劇で終わることへの不満を抱いていた讀者たちの氣持ちを汲んだものであり、それはその後、續々と現れた大團圓で終わる『紅樓夢』の續書からも窺い知ることができ、それら作品に對しては先鞭をつけた作品であると言えよう。

(注)

(1) 超建忠氏の『紅樓夢續書研究』によれば、紅樓夢の續書は現在のところ、九十八種にものぼると指摘している。

(2) 「脂硯齋と脂硯齋評本に關する覺書(一)」伊藤漱平著、人文研究(大阪市立大學)XII・9。一九六一年十月。

(3) この鐵嶺の高君とは、高鶚のことを指す。

(4) 例えば、『鶯鶯傳』では張生と鶯鶯は結局結ばれないとなつてゐるが、これが戯曲化された『西廂記』では結ばれることに改めてゐるの等は好例であらう。

主な参考文献

- ・明清善本小説叢刊初編、第十輯烟粉小説、『後紅樓夢』全五冊……天一出版社。一九八六。
- ・『後紅樓夢』……北京大學出版社。一九八八。
- ・『紅樓夢八十回校本』上下・『紅樓夢後部四十回』……俞平伯校訂。人民文學出版社。一九五八。
- ・『程甲本紅樓夢』全六冊……孫彥責任編輯。書目文獻出版社。一九九二。
- ・『紅樓夢』全十二冊……松枝茂夫譯。岩波文庫。一九七二〜一九八五。
- ・『紅樓夢』上・中・下……伊藤漱平譯。平凡社。一九六三。
- ・『紅樓夢大辭典』……馮其庸、李希凡主編。文化藝術出版社出版。一九九〇。
- ・『無才可補天——紅樓夢續書研究』……林依璇著。天津出版社。一九九九。
- ・『紅樓夢續書研究』……超建忠著。天津古籍出版社。一九九七。
- ・『紅樓夢卷』全二冊……一粟編。中華書局。一九六三。